

ガバナー訪問で感じたこと (2) クラブ・リーダーシップ・プラン (CLP) の重要性

ガバナー 大久保 昇

奉仕活動の軽視ではない

いま世界中のロータリーでCLP (クラブ・リーダーシップ・プラン) が盛んに論議され次第に実施されてきていることは、皆様もお聞きおよびと存じます。

各クラブを公式訪問して、この新しいプランに基づいたロータリー改革に多くの質問をよせていただきました。

これまでのクラブ組織は、「四つの奉仕」の理念実現のために、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕の4常任委員会を置き、それぞれの委員会のもとに、さらに特定の分野を担当する委員会を設置してきました。そのために委員会の数も20以上になり、実際には1人の会員がいくつもの委員を兼任する形で運営されてきました。

CLPでは、常任委員会はまず、クラブ管理運営委員会、広報委員会、会員増強・退会防止委員会、ロータリー財団委員会、そして奉仕についてはこの四つをまとめて、奉仕プロジェクト委員会が奉仕活動のすべてを管轄する形をとっています。そのため、これはロータリー・クラブの伝統的な理念である奉仕活動の軽視ではないか、などの疑問も出ました。

CLPはその冒頭に「ロータリーの綱領」として、有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓舞育成するため、次の四項目を挙げています。

- 第1 奉仕の機会として知り合いを広めること；
- 第2 事業及び専門職務の道徳的水準を高めること；あらゆる有用な業務は尊重されるべきであるという認識を深めること；そしてロータリアン各自が業務を通じて社会に奉仕するためにその業務を品位あらしめること；
- 第3 ロータリアンすべてがその個人生活、事業生活及び社会生活に常に奉仕の理想を適用すること；
- 第4 奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること。(RI定款第4条)

こうしたことを効率よく実現する目的で四つ

の奉仕を「奉仕プロジェクト委員会」というひとつの委員会に管轄させ、地元地域社会および他国の地域社会におけるニーズに応える教育的・人道的および職業的プロジェクトを企画・実施させることにしたのです。決して「軽視」ではなく、より重視し、かつ実行性を高めたとと言えます。同時に重複を防ぐ意味でもコストの低減化が可能になったと言えます。

CLPの意図するもの

CLPの意図は、100年の輝かしい歴史を経た今、ともすればマンネリ化・形骸化し、会員数も少なくなりがちなロータリー・クラブに新しい息吹きを吹き込み、21世紀の世界各国のコミュニティのニーズに適応できるクラブに改革することであり、「より高いレベルにクラブを導く」ことであることが明記されております。

この改革の結果、すべての会員がクラブの将来について意見を述べるチャンスを持つとともに、運営の簡素化の結果、より多くの時間を「奉仕と親睦に集中できる」ことが謳われています。

さらに、すべての会員が多くのプロジェクトに参与するチャンスを持つことで、指導者の養成も容易になるし、また実際の活動にかかわる機会が増すことで、会員の保持率を高め、退会防止にもなると思われれます。

一方、クラブの指導者層の側からすれば、目標達成のために、より多くのメンバーの協力が得られ易くなるというメリットも挙げられています。

CLPの大きな特色の一つは、長期目標の設定を可能にしたことです。

これまでのロータリー・クラブはどちらかと言えば単年度の目標に追われ、ともすれば十分な成果が得られぬままに次の役員が選出され、まったく新たな目標を追及する、という繰り返しであったと言えます。これでは21世紀の、この複雑な世界を相手にするプロジェクトは実現困難です。

CLPが打ち出したのは、少なくとも3年ないし5年を視野に入れた長期目標を設定することです。各年度にはこの長期目標の実現のために、

その年度にはどうすればいいか、という年度計画を設定します。そして、この計画実現のために各ロータリアンが何をすればいいか、という全員の参加を想定しているのです。このために役員全員とガバナーが出席する協議会をたびたび開催することが求められます。こうしたコミュニケーションの活性化が必要になるのです。

こうすることで、常に次の指導者を養成し、バトンタッチしていくという体制も可能になるでしょう。会長エレクト、会長ノミニ、直前会長の3者がびったり連携していなければ3～5年というタイムスパンの長期目標は実現不可能です。

ロータリー財団の重要性

CLPによる新組織の特色は、「ロータリー財団委員会」を独立した委員会にしたことです。これに関しましても一部ロータリアンの中には、ロータリー財団は本来ロータリーとは別もので、そのために一つの委員会を設けるのは、単に金集めを促進しようとしているに過ぎない、といった反発があるかもしれません。

財団の重要性に関しましては、是非とも「ガバナー月信」の2005年11月号を再度ご参照いただきたいのですが、今日の世界を見渡して貧困にあえぎ、多くの子供達が希望を失っているのを見ると、あらためて奉仕のグローバル化の必要性を感じます。

むろん今日、世界中には無数のNGOはじめさまざまな国際機関があって、こうした問題の解決にあたっています。しかし、こうした機関にあっても常に必要とされるのは資金であり、その資金を供給する国や財団なくしては円滑な活動は望めないのです。

昨秋のパキスタンの地震では73000人が亡くなり、300万人以上がホームレスになったと報じられていますが、その救済を可能にするのは数千億円という単位の巨額な資金なのです。

2005年6月、私が出席したシカゴにおける100周年記念ロータリー国際大会の席上、RI前会長のエステス氏はスピーチのなかで、ロータリー財団の強化こそ急務だ、と述べ、今年度は何としても会員1人あたり100ドル、総額1億2000万ドルの拠出を要請されました。これは、全世界の会員を対象に述べられたのであって、日本のような恵まれた国では、少なくとも1人150ドル以上の拠出をお願いしたいと思います。

広報に力を入れる意味

広報委員会を独立の委員会にしたことに関し

ては、先月号の月信に拙文を掲載いたしました。今日のようなマス社会にあっては、マスメディアによってその活動の姿が正しく報じられ、一般社会が理解をしてくれることが、その後の活動を容易にし、また会員を増やすことにも役立つことをご理解いただきたいと思います。

また、地域に密着したCATVなどミニメディア、商店会の新聞や、地方公共団体が発行するミニコミ誌も同様に重要です。

広報に力を入れることによって、ロータリー・クラブに対する地域社会の認識が高まり、クラブのイメージがアップされるだけでなく、クラブがさまざまな地域社会の団体や組織、企業などとの連携を密にする上でも、その活動ぶりが広く知られることは重要です。本地区が「かけ橋の年」を目標に掲げている意図がこうしたことにもあることを、よくご理解いただきたいと思います。

CLPを実施することのメリットは、委員会を整理し直すことで、よりコストを下げ、機能性を高めるだけでなく、今日の時代に適合した長期目標を可能にし、クラブメンバーの意識の向上、退会者を減らすことも含まれています。単なる組織改正ではありません。

長期目標達成のために委員会メンバーの任期を3年にすることが推奨されていますが、そうするとガバナーの任期が1年であることとコンフリクトが起こるのではないかという疑問が起きます。

シカゴ大会の際に、RI理事のケネス・モーガンさんにこの点を確認してみました。彼は「1年対3年、と思えるかもしれないが、通常エレクトとガバナーは協力しあって仕事をするわけだし、次のノミニもまあ連絡を密にするだろうから、必ずしも1-3でなく2-3か、場合によっては3-3もありうるのでは—」という答えが返ってきました。

今月から月信に連載予定の「ロータリー・クラブ、奉仕の一世紀」は6月まで続きますが、これを読まれると分かるように、ロータリー・クラブのあり方や活動ぶりも、世界史の展開とともに変化してきました。時代時代の地域社会や国際社会のニーズが変化するからです。

21世紀は皆様もよくご存知のとおりグローバル化の世紀です。グローバル化を視野に入れたロータリーが、その責務を果たすにはCLPのような改革がどうしても必要になることを、ぜひご理解いただきたいと思います。